

ニ ュ ー ス

1996年に開催される主な国際会議

- 1996年5月26日～30日
ミツバチ生産物（その特性，利用法とミツバチ治療学）に関する国際会議
イスラエル・テルアビブ
- 1996年6月24日～28日
第7回国際花粉媒介シンポジウム
カナダ・レスブリッジ
- 1996年8月12日～17日
第6回熱帯地域の養蜂
コスタリカ・サンホセ
- 1996年8月21日～24日
蜜源植物と花粉媒介に関する国際シンポジウム
キューバ・ハバナシティ
- 1996年8月25日～31日
第20回国際昆虫学会議
イタリア・フィレンツェ
- 1996年10月6日～10日
第3回アジア養蜂研究協会大会
ベトナム・ハノイ

第3回アジア太平洋昆虫学会議

1997年11月16日～22日の間，台湾昆虫学会などの主催による標記の会議が台中市の自然科学国立博物館で開催される。

会議は18の分科会で構成されており，その中に「養蜂と有用昆虫」のセッションも予定されている。

詳細連絡先は，The Third Asia-Pacific Conference of Entomology, c/o Department of Entomology, National Chung Hsing University, Taichung, Taiwan: 40227, ROC.

Tel +886-4-287-5695 Fax +886-4-287-5024

日本昆虫学会第56回大会，第40回日本応用動物昆虫学会大会・合同大会でのミツバチ，マルハナバチ関係の発表

1996年3月27日～29日に山口大学で開催された合同大会で発表されたミツバチ，マルハナバチ関係の標題を紹介したい。

ミツバチ関係

天野和宏・木村 澄（畜試）・西尾 剛（生資研）. 刺さないミツバチ（Split-sting honeybees）の造成.
松山 茂・鈴木隆久（筑波大応用生化学）・笹川浩美（蚕昆研）. ニホンミツバチ *Apis cerana japonica* Rad. の情報化学物質—ナサノフ腺から放出される揮発性成分の検討—.

箕輪了生・沼口康典・佐々木正己（玉川大農）. ミツバチの巣仲間認識に関わると考えられる体表炭化水素の可塑性.

中村文雄・山本こずえ・小川克明（片倉工業）. 液体窒素を用いたミツバチ精子の凍結保存について.

新島恵子（玉川大農）. ナミテントウの幼虫生育に關与する雄蜂児粉末中の活性成分.

沼口康典・箕輪了生・佐々木正己（玉川大農）. ミツバチの巣仲間認識における環境臭と体表物質の役割.

酒井哲夫（アジア養蜂研究協）. セイヨウミツバチとニホンミツバチの併飼蜂場での生態比較（続報）.

笹川浩美（蚕昆研）・松山 茂（筑波大）・山岡亮平（京工織大）・佐々木正己（玉川大）. 植物と花の共進化? “花とミツバチの共通の言葉” —ニホンミツバチを特異的に誘引する東洋ラン，キンリョウヘン（金稜辺）の花の香りとニホンミツバチの情報化学物質—.

佐々木 謙・傍島英雄・佐藤俊幸・小原嘉明（農工大農）. セイヨウミツバチ女王による雄卵発生開始機構.

佐々木正己・溝口真琴（玉川大農）・河野義明（予研）. 超個体としてのミツバチコロニーのエネルギー—経済と血糖.

Sureerat Deowanish・松香光夫・中村 純（玉川大農）・木村 澄（畜試）. PFLP法によるトウヨウミツバチ亜種内のミトコンドリアDNA変異.

吉田忠晴・佐々木正己（玉川大ミツバチ科学研）. ニホンミツバチとセイヨウミツバチ雄蜂の交尾飛行時間帯の相違—2種雄蜂混成群における種特異的な飛行—.

吉垣 茂・佐々木正己・松香光夫（玉川大農）. ミツバチコロニーの総合的対微生物戦略 2. 巣材の抗菌性について.

マルハナバチ関係

浅田真一（神奈川県農総研）・光畑雅宏・小野正人（玉川大農）. 日本産マルハナバチの実用化に向けてⅡ—トマトへの訪花特性—.

光畑雅宏¹・浅田真一²・小野正人¹（¹玉川大農・²神奈川県農総研）. 日本産マルハナバチの実用化に向けてⅠ—増殖・周年飼育法の確立—.

小野正人（玉川大農）. 日本産マルハナバチ類の総合的研究.

米田昌浩（三重大生物資源）. コマルハナバチにおける巣内の蜜・花粉の貯蔵量と外役バチの採集物.

玉川大学ミツバチ科学研究施設から



カルフォルニア大学のペン教授



USDAのシルベスター博士



USDAのシマヌキ博士

海外研究者の来訪

農林水産省の海外研究者招聘事業で来日中のカリフォルニア大学デービス校昆虫学部の Christine Y. S. Peng 教授が3月13日～14日に来訪。ミツバチ研究での意見交換や「最近のミツバチ寄生ダニの研究について」のセミナーが開催された。

同じく海外研究者招聘事業で来日中の米国農務省農業研究課(USDA)ミツバチ育種・遺伝・生理研究部門の Allen Sylvester 博士が3月18日～19日に来訪。ニホンミツバチの有蓋蜂

児のサンプリングや育種・遺伝に関する意見交換が行われた。

4月8日には米国農務省農業研究課ミツバチミツバチ研究部門の Hachiro Shimanuki 博士が来訪。「最近のミツバチ研究部門における研究動向」に関するセミナーが開催され、意見交換の場が持たれた。

この他3月～4月にかけて、南米のウルグアイ、アルゼンチン、ブラジルの各国から、いずれもプロポリス関連で研究者や業者の来訪が相次いだ。

ミツバチ科学研究施設のホームページ

インターネットの普及にともない、玉川大学（玉川学園）でもホームページを公開しているが、4月よりその中にミツバチ科学研究施設のページも加えられた。現在調整中の部分もあるが今後最新の情報を紹介できるよう充実していく予定である。

<http://www.tamagawa.ac.jp/>

編集後記

福島県立博物館の佐治氏には、会津盆地南縁山地（本誌16巻2号）の続報として、愛媛県石鎚山系の事情を紹介いただいた。採蜜時に円錐状にしたコモを用いる点は東部の川之江市でも同様の方法が取られており（本誌1巻2号）、伝統的な手法と思われる。畜安研の中村氏らによる日本で最初のフライトルームでのミツバチ飼育の成功に加えて、腐蛆病に対する有効薬剤の研究に期待したい。ケニヤで養蜂の研修を受け、青年海外協力隊で活動してきた高見氏に、またスリランカの養蜂見聞を原氏に寄稿を受けた。（忠）